

泣き虫の年下男子お世話してたら
大人の男になって私を迎えに来た

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

保育園の電気を一つずつ落としていくと職員室の時計が二十二時を少し回ったところだった。

今日も長い一日。汗と粉ミルクと子どもたちの笑い声の余韻が肌に張りついている。ため息について、バッグに連絡帳をしまいかけたときスマホが震えた。

「おねえちゃん迎えに来てえ！」

スピーカー越しに、松浦心平——弟の声。

背後に居酒屋のざわめきが混じる。

「心平？ 今どこ？」

「南町の『鰺市』。守と飲んでたら酔っ払っちゃてさあゝ」

「……もう。明日も早いのに」

ため息をつきながらも、鍵をつかみ、足は自然に玄関へ向かう。車に乗り込みエンジンをかけると、窓の外に湿気が曇りを描いた。ワイパーで一度拭う。アクセルを踏み出しながら私は懐かしい名前を口の中で転がす。

——守。海老沢守。

心平の隣でひよこっとな顔だけ出して、泣いていた小さな男の子。うちは仕出し屋で、忙しい父母の代わりに私が台所に立っていた。心平がぽつりと「守、一人でご飯食べてるんだって」と言った日、胸にとげみたいなのが刺さって、私は反射的に言っていた。

「いつでも連れておいで。ご飯いっぱいあるから」

あの日から、守はご飯を食べに来るようになった。

湯気に目を細めて「おいしい」と笑う顔。宿題と一緒に解いて、できたね、と頭を撫でると少し照れて、でもうれしそうに笑う顔。

私にとっては、弟の友だち。可愛い年下の男の子。

——それまでだった、はずなのに。

「鰯市」に着くと、のれんが風に鳴って、ほのかに焼き魚の匂いが漂った。店先で手を振る心平は、相変わらずの犬っぽい笑顔だ。

その背後から、もう一人が出てくる。私は思わず息を止めた。

背が高い。肩幅が広い。濃紺のスーツに、白いシャツの襟元。

顎の線はずっとシャープで、目元に薄い影。

だけど、甘めの顔立ちや口角の上がり方は、たしかに――。

「お久しぶりです。海老沢守です」

低い声が胸に落ちる。名前を聞いた瞬間、時間が巻き戻った気がして、それから一気に現在へ引き戻された。

「……守、くん？」

「はい。おねえちゃん……いえ、花織さん」

名前を呼ばただけで、耳が熱くなる。私は慌てて踵を返した。

「とりあえず乗って。家まで送るから」

後部座席に転がり込んだ心平は、シートベルトを締める前にすでに舟をこぎ始めている。助手席のドアが開いて、守が乗り込む。

指がシートベルトを探す仕草が、なぜだかやけに大人びて見える。金具がカチリと鳴った。かすかに煙草の残り香とアルコールの熱を帯びた体温の匂いが混ざる。

走り出すと、車内に静けさが落ちた。信号待ちでふと横を見ると、守は窓の外に視線を投げ、懐かしい街並みを眺めている。

「大きくなったね、守くん。びっくりした」

「そう見せたくて、頑張りました」

短く返ってきた言葉に、どこか誇らしさが滲む。

「今は……?」

「商社で働いてます。最近日本に戻ってきたんです。三年ほどロンドンに赴任してて……」

ふっと笑う横顔。信号が青に変わるたびダッシュボードの光が彼の頬に薄い影を描く。低い声が胸板を揺らすたび、狭い車内の空気が私の肌まで震わせた。

家に着くと心平は「サンキュ〜」と呂律の回らない声で降り玄関へ吸い込まれていった。

静けさが一段深くなる。私はハンドルに手を置いたまま前を見た。

「駅まで、送るね」

「少しだけ、遠回りでもいいですか」

「え？」

「……話したいことが、あります」

ハンドルが自然に右へ切れる。川沿いの道に入ると、街灯が水面に揺れて、窓ガラスに光の線が走った。

不意に、守が言った。視線はこちらを向いていない。

前方の暗がりを見たまま、静かに続ける。

「……ロンドンは、逃げ場のない場所でした。言葉も文化も、失敗したら全部見られている感じで。悔しくて、眠れない夜がたくさんありました」

花織は黙って聞いている。

信号が赤に変わる。ブレーキ。車内が淡い朱に染まる。

「でも折れなかったのは、帰る場所があると思っていたからです」

「帰る場所？」

「松浦家の食卓です。中学のとき、毎日のように助けてもらって、守ってもらって……あの時の温かさがずっと心に残っていました」
守はそこで、初めて横を向く。

視線が合う。昔はまっすぐ見返せなかった距離だ。

「中学の頃から、ずっと好きでした。花織さん」

心臓が一拍、遅れて跳ねた。指先がハンドルの革をぎゅっと掴む。

「冗談、でしょ。だって、私……」

「年上だし、弟の同級生で。わかってます」

守は言葉を重ねるたび、声を少しだけ落とした。

「だから、言わなかった。俺は小さくて、泣き虫で。あなたに守られてばかりだったから」

食卓の湯気、笑い声、守の「おいしい」という声。

あの日の記憶が胸の奥からゆっくり浮かびあがる。

「あの家で食べたご飯の味も、宿題を見てくれた手の温度も、全部ずっと覚えてる。だから、決めたんです。大人になって、ちゃんと稼げるようになって、強くなったら——迎えに行こうって」

私の名前を呼ぶ前の一拍の沈黙が車内の空気を柔らかく震わせた。

「今度は、俺が花織さんを守る番です」

赤信号が、車内を淡い朱に染める。

私は唇を湿らせ、言葉を探した。五歳も年下。弟の同級生。常識。

仕事。毎朝六時の目覚まし。絵本の読み聞かせ。お迎えの時間。

現実が、胸の前に並んで立ちほだかる。

「……守くん」

やっと絞り出した声は、自分でも驚くほどかすれていた。

「ありがとう。でも、私は」

「急がなくていいです。答えも、距離も。俺、焦りません」

ふっと笑って守は視線を落とした。その横顔はどこか少年の面影を残しながら、もう少年のものではなかった。

信号が青に変わる。私はアクセルを踏む。

心臓の鼓動がペダルに伝わって、車体ごと小さく震えた気がした。

駅に着くと、守はシートベルトを外し、ドアに手をかけた。

開く直前、こちらを振り返る。目が合う。

低い声が、もう一度だけ私の名前をなぞった。

「花織さん」

その呼び方が、やけにまっすぐで、胸の奥に熱を置いていく。

「おやすみなさい。また連絡します」

ドアが閉まる。空気が一瞬で冷えて車内に私の呼吸だけが残った。

家に戻ると、心平はリビングで大の字に寝ていた。

毛布をかけてやり、照明を落とす。

シャワーを浴びる。熱い水が肩を叩くたび耳の奥に低い声が蘇る。

——今度は、俺が花織さんを守る番です。

ベッドに横たわっても、まぶたの裏にスーツの広い肩と、長い指と